

【二番目物 受け継ぐ人々】

伝統を受け継ぐ 登米謡曲会



室町時代に隆盛期を迎え、織田信長や豊臣秀吉、徳川家康といった多くの武将に愛された能。時代の流れとともに廃絶していく中、登米能は地域に根ざし、住民に愛されながら受け継がれてきました。



日本を代表する舞台芸術
今に伝える登米謡曲会

能は、650年以上の歴史を誇る、日本を代表する舞台芸術です。明治維新後、廃藩置県によって能を愛してきた大名がいなくなり、廃絶の危機に。そんな中、登米の地で演じられていた能を守ろうと、登米伊達家の旧家臣である大内五郎右衛門が立ち上がり、登米謡曲会の前身となる親睦者を設立。後世へと継承しました。

登米謡曲会は、明治41年に発足。登米支部28人、米山支部4人、迫支部8人の計40人で活動し、保存と継承に取り組んでいます。日頃から登米、米山、迫の支部ごとに謡を稽古。月に1回程度、稽古の成果を披露する「月並会」を開催し、技術の向上に励んでいます。

その技術が認められ、昭和62年に仙台青年会議所の「昭和の遣欧使節団」に同行し、イタリアで演能。平成12年には、文化財保護などの功績が認められ、文部大臣

登米能を守り、 地域の活性化を 目指して歩み続ける

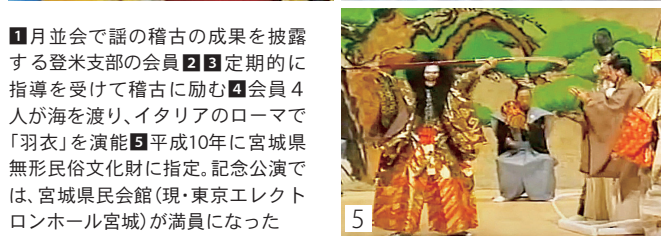
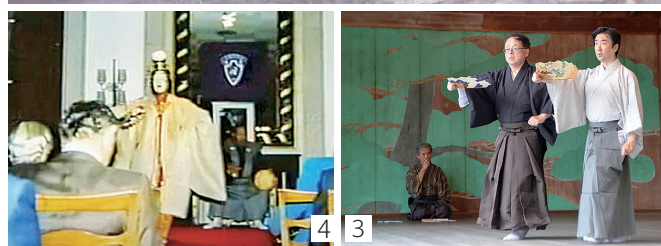
賞と国土庁長官賞を受賞するなど、高い評価を受けています。

「会員数の減少や新型コロナウイルス感染症などの影響で、存続していけるか不安な時期もありましたが、たくさんの人たちからの応援と協力のおかげで継続できています。そう感謝の思いを口にするのは、登米謡曲会で会長を務める米谷甚七さんです。

仙台藩の5代藩主、伊達吉村が創設した流派「金春

大蔵流」を、明治維新以降も絶やさずに受け継いできたのが登米能です。口伝により継承し、独自のスタイルを築き上げました。

米谷会長は「私たちには登米能を守るという目的があります。それだけではなく、皆さんの人に見に来てもらい、登米市のことを好きになっほしいという思いで活動しています。今年10月に開催した喜多流能の公演では、テレビでも見かける狂言師の野



1月並会で謡の稽古の成果を披露する登米支部の会員 2 定期的指導を受けて稽古に励む 3 会員4人が海を渡り、イタリアのローマで「羽衣」を演能 4 平成10年に宮城県無形民俗文化財に指定。記念公演では、宮城県民会館（現・東京エレクトロンホール宮城）が満員になった

Interview



登米謡曲会
会長 米谷 甚七 さん
☎ 0220(52)2316(登米公民館)

村萬斎さんと長男の裕基さん、喜多流能楽師の佐々木多門さんに出演してもらい、市外からもたくさんの方が登米町を訪れてくれました。これからは登米能を守り続けながら、交流人口を少しでも増やしていくことで地域を活性化していきたいと思っています」と決意を胸に歩みを進めます。

「能は、敷居が高いように感じるかもしれませんが、稽古を積めば誰でも舞台上で上がることができます。始めるのに『今からでは遅い』ということはありません。仕事を定年退職した後からでも始められるので、活動の様子を見てみたいという人は気軽に連絡をください」と笑顔で呼びかけます。



狂言「鐘の音」を、庄巻の演技力で観客を魅了する野村萬斎さんと裕基さん 佐々木多門さん(左)は迫力ある演技で能の「小鍛冶」を披露